選擇集の宗教的意義

千賀眞順

一

選擇集は「淨土宗の奥義なり」、（選擇之傳、淨全八、68）と相傳され、教判、宗旨、信行、安心、依師の五大要件を完備せる、さすがに「智惠第一法然房」の眞面目が見られる。宗義の組織的体系の完璧なこと本書を措いては他に求められない。實に一代佛教の宗教としての精要を盡されてゐる。本書の終末に「然るに今圖らざりき、仰を蒙りて辭謝するに他なし、仍つて今なまじいに念佛の要文を集め、剩へ、念佛の要文を述ぶ、唯命旨を顧みて不敏を顧みず」とある如く、藤原兼實の請願に基くのであるが、同時に内容、体裁等より推知して未來傳通の念願ありしことも首肯される。この末代傳通の意義を持つた淨土宗の根本寶典たる選擇集が文集の撰述形式を取つてゐるのが注意される。文集の撰述形式は、自己の教養判斷によつて自由に論議する撰述より數倍の教養に努力を要する場合が多い。智慧第一人者の法然上人の選擇集の場合特にこの感深いものがある。

思ふに道綽禪師の安樂集を初め淨土系諸師は擧つて集、文類の文集の撰述形式を取つてゐる。曇鸞法師の論註、善導大師の觀經疏の如く特定の經論の場合も文集の撰述形式に概括されるから、淨土祖師の撰述には一貫する特色、即ち佛教の宗教的展開による淨土教の「唯信佛語」の凡夫性が發揮されてゐる。類型的宗典たる安樂集は、無量壽經、觀經、小經、智度論、往生論、論註等、經典十四部、律一部、論八部、釋三部等總じて五十六部の多き文集であるから禪師の

該博なる佛教の教養が窺はれる。同時に開卷第一に「此の安樂集一部の內に總じて十二の大門あり、經論を引いて證明し信を勸め往を求めしむ」。（淨全一、673）とある如く所謂勸信求往のための文集である宗教的意義が注目される。また慧心僧都の往生要集の開卷には「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、乃至予が如き頑魯の者到底入り得ない、故に覺り易く行じ易い念佛の一門に據つて、いさゝか經論の要文を集める」。（淨全十五、37）とある如く淨土要文を選集して念佛を勸說し、更に本書第八念佛證據に占察經、大經、觀經、小經、般舟三昧經、鼓音聲經、往生論、安樂集、觀經疏、群疑論等を引證して（同上、129）西方往生を勸めてゐる。佛道の學行は限りなく追求すべきもので「法門無盡誓願知」でなくてはならない。併し學問は救濟の道でなく、學行を超えて信行すべき佛教の宗教的自覺を教誡されてゐる。宗教的自覺により信仰の道に入り無上道を學ばんとするものはいたずらに分別心をとぎすましてこれに鋭くなるより、むしろ愚痴にかえり一文不知のともがらと身を等しくする唯信佛語の立場に立つのでなければならない。選擇集の宗教的意義をこの觀点に立つて見なくてはならない。更に道綽、善導、慧心等の大先達すら成す能はなかつた淨土教獨立の礎石を確立されたものとして、本書は注目すべき宗教的意義をもつのである。

二

文集として本書には十經の引文、二十二の經名、一論の引文、五種の論名、十七の疏釋の引文、一種の疏名を引證され、「智慧第一」の該博なる教養が窺はれる。然し正しく淨土宗義の典據として特に尊重し引證されたものは三經と善導大師の四部八卷（般舟讚一卷、當時散佚）である。即ち第一章安樂集、第二章散善義、往生禮讚、第三章大經、觀念法門、往生禮讚、第四章大經、第五章大經、往生禮讚、第六章大經、第七章觀經、定善義、觀念法門、第八章觀經、散善義、往生禮讚、第九章往生禮讚、第十章觀經、散善義、第十一章觀經、散善義、第十二章觀經、散善義、第十三章阿彌陀經、散善義、第十四章阿彌陀經、觀念法門、往生禮讚、散善義、法事讚、五會法事讚、第十五章阿彌陀經、觀念法門、往生

禮讃、第十六章阿彌陀經、法事讃である。記主良忠上人が東宗要第三に「十六章の大綱を案ずるに、廣く三經の明文に就て當分淨土の眞實を判ずる」。（淨全十一、52）と仰がれたが、この場合三經の眞實を領受開顯せる道綽善導兩先德に指示を求められてゐる。（往生大要抄、全集67）何故聖道をさしをいて淨土の一門に依られるか。この課題を解くには聖道淨土二門の祖師に根本的に異なるものがあることを明にしなくてはならない。佛教史家は教理發展の推移を論ずる場合、その動機を看過しがちである。思ふに釋尊の人格に滿足せる初期の小乘教徒は簡單な卑近な教說に悅服したが、自由な理想家は大乘教として教祖の教義を哲學的論理的に裝飾し、その大乘聖道の歸結が釋尊を超えた淨土教にあることを教えられ、龍樹の十住論、天親の往生論、馬鳴の起信論を生み出した。併し多くの大乘の聖道諸師は却つて教權的なる小乘教に歸らうとしでゐる。即ち「聖道の修業は智慧をきわめて生死を離れる」（勅傳四十五）佛道となり、佛の深き大悲の中に生きてゐる衆生が自己の有限な知性のはからひによつて、そこから眼をそむけて自己を絕對化しようとする。これを超えて釋尊の自證の体驗が本願であり、從つて一代教法はこの自證の法を說かれた。淨土教は釋尊を超えた彌陀中心の佛教となり、この信念を決定しこれを明に表白されたのが淨土教祖師である。選擇集には淨土教獨特の教判である安樂集の聖道淨土の二門判を依用されてゐる。即ち道綽禪師は曇鸞大師を繼承しつゝ、鸞師が無佛の時と言はれたのを末法々滅と痛感して新なる体驗とされた。即ち釋尊の時代を去ること遠く、人の理解力乏しき今日、教理深遠なる聖道門は證し難しとし、たゞ淨土の一門のみが、吾等の通入すべき道であると斷定されてゐる。人間の機即ち人間の素質能力に相應する教法が淨土の教法と確信された以上、自分の判斷分別によることを否定し、唯だ佛說幷に聖者の指南を仰ぐ宗教的自覺から安樂集が文集撰述されてゐる。

善導大師は鸞綽二師を祖述し三經、特に觀經を身證し、人間の機即ち素質能力に就て自己を反省內觀された。行者の最初にして最大のなやみは棄つべき苦の自己の棄てられない苦惱である。そこに人間の根本惡、罪業がある。即ち「罪

惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに沒しつねに流轉して出離の緣あることなし」（散善義淨全二、56）とは自分自身である。かゝる導師の內觀より地上の相對有限を超えて彼岸淨土を願生せずにゐられない本願念佛の体驗があつた。善導大師が大經によつて彌陀の本願を体驗されたことは彌陀義の著作ありしことで十分推知されるが、觀經によつて凡愚の救濟を自己に即して体驗身證され、小經によつて諸佛の證勸あるによつて確信を深められた、この三經によつて淨土の敎說を確信し、「深心といふは、仰ぎ願くば一切の行者等、一心に唯だ佛語を信じて身命を顧みず、決定して依行せよ、佛の捨てしめたまふをば即ち捨て、佛の行ぜしめたまふをば即ち行じ、佛の去らしめたまふところを即ち去れ。これを佛敎に隨順し佛願に隨順し、佛意に隨順すと名づけ眞の佛弟子と名づく」（散善義淨全二、56）と言ひて正雜批判されてゐる。正行は專ら三經を讀誦し、意識、言語、行爲の全てを彌陀と淨土とに集注し、更に正定の業及び助業とする。「一心に專ら彌陀の名号を念じ、行住坐臥、時節の久近を問はず念々に捨てざるもの」即ち間斷なき稱名が正定の行で、讀誦、觀察、禮拜、讚嘆、供養その他は助業となす。この正定、助の二業以外の諸善は、悉く慢心と名利の念を離れ得ぬ雜行であつて、正行の者が「彼の佛の願に順ずるが故に」、百人が百人まで必ず往生するに對して、百千の中稀に一人五人が往生するに過ぎない。この念佛の佛道は散善義に「憍慢と弊と懈怠とはもつて此の法を信じ難し」とあり、相傳の口決にも「信心、卑下、他力、精進」とあり、更に一枚起請文にも「念佛を信ぜん人はたとひ、一代の法をよく〳〵學すとも（すてゝ）一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまひをせずして唯一向に念佛すべし」と誡められる如く、あくまで宗敎的自覺にをいてのみ可能なるを强調されてゐる。布施、持戒、孝行、師長に奉事するなど通俗の尊ぶ德目が多いが限られた人のみ可能である。然るに彌陀の名号は、佛の無量の萬德の歸するところであるから、これを稱する功德は勝れてゐる。而も誰にも行ひ易いから一切衆生を平等に往生させる大善根である。本書に

「若し夫れ像を造り塔を起すを以て本願としたまはば、すなはち貧窮困乏の類は、定めて往生の望は絶たん。然るに富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。若し智慧高才を以て本願としたまはば、則ち愚鈍下智の者は、定めて往生の望を絶たん。然るに智慧ある者は少く、愚痴なる者は甚だ多し、若し多聞多見を以て本願としたまはば、則ち少聞少見の輩は、定めて往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し、若し持戒持律を以て本願としたまはば、則ち破戒無戒の人は、定めて往生の望を絶たん。然るに持戒の人は少く、破戒の者は甚だ多し。自餘の諸行これに準じて知るべし。」

稱名念佛を選擇して本願とされたのは正にこのためである。「佛道修行はよく〳〵身をはかり時をはかるべきなり」(念佛大意)と言ひ「悲しきかなや、善心は年々に隨ふて薄くなり、惡心は日々に從つていよ〳〵まさる、されば人の言へることあり、煩惱は身に添へる影、去らんとすれども去らず、菩提は水に浮べる月、取らんとすれども取られず」(念佛往生要義抄)の深き罪業に悲泣し「一心專念」の文により「予が如き下機の者が念佛の本願によつて救はる」と感激し感泣されてゐる。觀經にも善導の釋にも至誠心(眞實心)深心(深信)回向發願心(願生心)の三心、恭敬、無餘、無間、長時の四修作業は一向なる歸依、一向なる集中の意味で「源空の眼には三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛なり」。と言ふて己の深き罪業とこれを救ふ佛の約束とをひたすら信ずる念佛で、この衆生の罪業に佛の大悲とのみを殘し佛と衆生の間の一切の介在物を除去し盡されたことは選擇集に見える注目すべき宗教的意義と言はなくてはならない。佛教々理の推移する動機を課題するとき當然の歸結であると共に、宗教信仰の本質を顯はしたものである。この意味に於て選擇集の撰述は日本佛教史上の重大事件であつた。されば毘沙門堂明禪が述懷抄に本書を評して「一遍はなにともおもひわくかたなく見をはりぬ。二遍には偏執のとがまねくらんとおもひて見をはりぬ。第三遍よりは深旨ありと見なして四五遍これを見るに信をまして疑なし」と評してゐるが、まことにいみじき言葉

で本書の眞價を發揮せるものと言ふべきであろう。

三

南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲先の念佛は無限にして相對的な我々が自己の存在の根底として絶對的の關係にある如來の人格に光攝されてゐる自覺であり、その如來に直接渴仰給仕することである。この念佛信仰は決斷を以て己をすてゝ佛の慈懷にとびこむことがなければならない。「一丈の堀をこえんには一丈五尺の堀をこえんとはげむべし、往生を期せん人は、決定の信をとりてあひはげむべきなり」（物語集）と言はれる決信が肝要で相對に明け暮れる單なる現實肯定には大經、小經に誠えらるゝ難信でなければならない。有限の自己が如來そのものの攝取不捨の本願大悲の中に新なる永生的生命を與へられることでなくてはならない。併し念佛は大悲を唯だ吸收することであつてはならない。佛の大悲誓願は我等念佛者の念願として具体化されることによつてのみ大悲誓願が成就される。「葦しげき池に十五夜の月のやどりたるはよそにては、月やどりたりとも見えねども、よく〳〵たちより見れば葦間をわけてやどるなり。妄念の葦はしげけれども三心の月はやどるなり」（諸人勸化の詞）とあり、妄念のまゝ「煩惱のうすきあつきも顧みず、罪障の輕き重きをも沙汰せず、唯だ口に南無阿彌陀佛と唱へて、聲につきて決定往生のおもひなすべし」（大胡消息）で聲は人格であり、聲に促されて信仰を培養して、現實のまゝ御宮づかひの行願がなければならない。如來の悲願に目覺めて「願共諸衆生往生樂國」の念願こそ選擇集の宗教的地上的意義でなければならない。